

医心 伝心

「照于一隅」の医療活動

～一個人から組織へ、組織から社会へ～

富山県医師会常任理事 鳴河 宗聡

先日、ビジネス雑誌で僧侶が執筆した「一隅を照らす」というテーマのコラムを読み、研修医のころ僧侶で医師の恩師からこの言葉をいただいたことを思い出した。天台宗を開いた伝教大師最澄の書である「山家学生式」の冒頭部分に「径寸十枚是れ国宝に非ず、一隅を照らす此れ則ち国宝なり」という言葉が記されている。この書の解釈には諸説あるが、日本仏教協会の統一見解によると「自分自身が置かれた場所で精一杯努力し、明るく光り輝くことのできる人こそ貴い国の宝である」という教えだ。最澄が説いたこの言葉は、現代の医療現場にも示唆を与える。例えば、時間に追われたわずか数分の診察時でも、患者さんへの挨拶や目線、あるいは説明を丁寧に行う姿勢やふるまいが、信頼や安心感を育む重要な瞬間であり、往々にして「小さきものの積み重ね」に尽きる。そして診察室だけではなく、受付スタッフの温かな声かけや看護師の細やかな配慮も、心のケアの一環であり、医療技術がどれほど高度化しようとも、人と人との関わりが「一隅を照らす」原動力となる。

地域医療では、人口減少と超高齢化による医療資源不足や偏在が大きな問題となっている。このような状況下で、へき地診療所を守る開業医や公立病院の勤務医が過疎地や高齢化地域の健康を守る砦として奮闘しており、オンラインカンファレンスやデータ共有プラットフォームを活用するなど、離れた地域同士の医師が知見や最新ガイドラインを迅速に共有する仕組みが整備されつつある。

医師会はそうした個々の努力を繋ぎ、大きな輪へと広げる地域連携のハブとして機能することが期待される。また、社会的発信と啓発において重要な役割を担うことはもちろんのこと、地域医療

を持続可能なものにするため、必要とされる人材育成に取り組むことが重要である。医師会自体も変革期を迎える中で、時代の要請に応じた知識・技術研鑽はもとより、共感力やコミュニケーション能力、地域との協調姿勢といったヒューマンスキルも含めた総合的な成長を支えることが求められている。そして一人ひとりの尽力を束ねてより大きな光とし、社会に届けるのが医師会組織の役割である。

医師会組織の改革・強化も重要なテーマで、組織率低下が課題となる中、特に若手勤務医の参画を促すことが重要である。「医師会に入ると何かが変わる」と実感してもらえよう、会員のニーズを的確に把握し、従来の年金・共済といった福利厚生面だけでなく、メンタルヘルスサポートや育児と仕事の両立支援など、医療面以外にも多様な施策を展開していくことが求められる。組織内のコミュニケーションを活性化し、会員同士が互いに助け合う風土を醸成する取り組みを通じて「プロフェッショナルな集団」としての結束が強まれば、それ自体が社会に大きな光を放つ。

組織力が高まれば、行政や国への提言力も増し、住民の声を反映した建設的な医療政策の実現につながる。政策への提言は、自己利益の追求ではなく「国民と共に歩む専門家集団」としての使命感からであり、建設的な政策提言を行うことが社会全体の利益につながる。

変化のスピードが増す中、まずは自らの「一隅」でできることを着実に実践し、県医師会の一員として地域と社会に貢献していきたい。そしてみなさんとともに、社会全体の未来を照らす光となることを願っている。